

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』は ロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

— 英雄物語に現れた勇気、誘惑、人生の虚しさ —

三 浦 清 美

1. 『デヴゲーニイの事績』とは何か

『デヴゲーニイの事績』は、ムスリムとキリスト教徒の子孫であるビザンツ帝国の国境警備の戦士デヴゲーニイ・アクリト（ディゲニス・アクリティス）を主人公とする中世ロシアの物語で、ビザンツの英雄叙事詩『ディゲニス・アクリティス』に淵源をもつ。デヴゲーニイ（ディゲニス）という語は、「(ムスリムとキリスト教徒の) 二つの生まれをもつ」と「よい生まれの」が掛け合わされており、アクリト（アクリティス）という語はビザンツ帝国の国境警備の兵士を指している。この作品は、ムスリムである父アミール・ツァーリがキリスト教徒であるデヴゲーニイの母親を略奪する前半部と、この二人の息子であるデヴゲーニイ・アクリトがビザンツ帝国の軍司令官（ストラティグ）の娘（ストラティゴヴナ）を略奪する後半部の、二つの略奪婚物語から成り、トルコ東部、シリア、レバノンにかけての、アラブ・イスラーム勢力と対峙するビザンツ帝国国境地帯の住人の日常生活を反映していると考えられている。

かんたんに『デヴゲーニイの事績』の粗筋を紹介しておこう。作品の前半部では、主人公デヴゲーニイ・アクリトの出生までが語られる。主たる登場人物は、デヴゲーニイの両親である。父親となるのはアラブのアミール⁽¹⁾、母親となるのはキリスト教徒のある寡婦の娘で、3人あるいは5人の兄をもっていた。アラブのアミールが、その娘の美しさの評判を聞き、その娘を略奪する。その娘の兄たちは出陣し、妹を取り返そうとする。彼らはアミール、ツァーリを倒すが、妹とアミールはすでに恋仲になっていて、兄弟たちはアミールのキリスト教への改宗を条件に二人の結婚を許す。アミールは、イスラームの地を捨ててキリスト教徒の領土に移り、洗礼を受ける。アミールとキリスト教徒の娘のあいだに生まれたのが、デヴゲーニイである。後半部では主に、キリスト教とイスラームの二つの生まれをもつこの主人公の勇猛さをあらわす数々のエピソードと、その嫁取り冒険譚が語られる。渡辺金一によれば、ギリシア語版の『ディゲニス・ア

(1) 「司令官」、「総督」を意味するアラビア語で、転じてイスラーム世界での支配者、王族の称号として用いられるようになった。「アミール」『世界大百科事典 Ver.1.0』日立デジタル平凡社、1998年。

クリティス』は「古代末期のロマンの伝統に立っている。」⁽²⁾

日本のビザンツ研究では、渡辺のあと、大月康弘が近著『ヨーロッパ史』のなかで、渡辺の路線を継承して、「境域を生きる」諸民族のありさまを描く作品としてこの叙事詩を紹介しているほか⁽³⁾、戸田聡も『西洋中世文化事典』の「中世ギリシア文学」の項で、ビザンツの「民衆文学」であるとしながら、その成立年代は「12世紀頃？」とやや慎重な書き方をして、伝存するグロッタフェッラータ写本テキストとエスコリアル写本テキストの「どちらが原典あるいは原型（アーキタイプ）に近いかに関して、いまだ定説はない」としている⁽⁴⁾。

グロッタフェッラータ写本とエスコリアル写本の相違については、古典文献学者の引地正俊がその包括的な論文で、かなり立ち入って考察しているので⁽⁵⁾、本稿でもそれを参照したい。この作品テキストの最古の写本であるグロッタフェッラータ写本からテキストの翻刻、英語への翻訳を行ったJ. マヴロゴルダートの古典的研究⁽⁶⁾があったが、1998年にE. ジェフリーズによってグロッタフェッラータ写本テキスト、エスコリアル写本テキストからのテキストの翻刻、英語への翻訳⁽⁷⁾が行われたのを契機として、引地はそれまでの先行研究を総括的に見直ししながら、ビザンツの英雄叙事詩『ディゲニス・アクリティス』がどんな作品であったのかを考察したのだと思われる。

一方、ビザンツ文学のこの英雄叙事詩にはロシア語版があり、中村喜和が早い段階で、渡辺のこの作品への着目を踏まえ、おもにP. パスカル、H. グレゴワールによるフランス語文献⁽⁸⁾とV. クジミナによるモノグラフ⁽⁹⁾に立脚して、このロシア語版について考察している⁽¹⁰⁾。中村は、ロシア語版の特徴を「エピソードの簡略化とフォークロア的色彩の強化」と捉えている。『デヴゲーニイの事績』には、三浦清美による日本語訳がある⁽¹¹⁾。

ロシア語版表題の日本語訳について付言する。ロシア語の表題 «Девгениево деяние» を、中村

(2) 渡辺金一「ディゲニス・アクリティス」『世界大百科事典 ver.10』日立デジタル平凡社、1998年。

(3) 大月康弘『ヨーロッパ史—拡大と統合の力学』岩波新書、2024年、127-130頁。

(4) 「中世ギリシア文学」西洋中世学会編『西洋中世文化事典』丸善出版、2024年、389頁。

(5) 引地正俊「ディゲニス・アクリティス—ビザンチン・ギリシャの物語詩に見る東と西」早稲田大学比較文学研究室『比較文学年誌』38号、2002年、1-17頁。

(6) Mavrogordato J. *Digenis Akritis* (Oxford at the Clarendon Press, 1956).

(7) Jeffreys E. *Digenis Akritis: The Grottaferrata and Escorial versions* (Cambridge University Press, 1998).

(8) たとえば、以下のもの。Pascal P. «Digénis» *slave ou la «Geste de Devgenij»*, Byzantion, 1935, t.X, pp. 301-334; Grégoire, H. *Le Digénis russe, Russian Epic Studies*, Philadelphia, 1949, pp. 131-170.

(9) Кузьмина В.Д. *Девгениево деяние*. М., 1962.

(10) 中村喜和「ロシアの『ディゲニス・アクリタス』—中世ロシアの翻訳作品に寄せて—」『一橋論争』56巻1号、1966年、62-71頁。

(11) 三浦清美「デヴゲーニイの事績—中世ロシア文学図書館 (XXVIII)」『エクフラシス』15号、2025年、1-21頁。この翻訳の底本は以下。Библиотека литературы Древней Руси (Дальше БЛДР). Т. 3. С. 68-91, 364-366. 『中世ロシア文学文庫』のこの中世ロシア語テキストは、中世ロシア文学研究者のO. トゥヴォローゴフが、③チホヌラーヴォフ版と④ポゴージン・チトフ版を合体させて制作したものである。

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

は『デヴゲーニイの武勲』と翻訳している。ところが、ここで扱われるデヴゲーニイの勇壮なふるまいは戦場のそれに限られるものではなく、ストラティゴヴナ（軍司令官令嬢）とのラブシーンも物語を構成する重要なファクターである。「деяние」という語を「武勲」と訳してしまうことは、語の内包を限定しすぎる嫌いがある。以上を踏まえて本稿では、この作品を『デヴゲーニイの事績』と呼ぶ。これはこの作品で1992年に東京大学スラヴ文学科で博士学位を取得した小倉千津子に倣ったものである⁽¹²⁾。

2. 『ディゲニス・アクリティス』／『デヴゲーニイの事績』の 諸版と作品をめぐる謎

この作品には、中世ギリシア語で①グロッタフェッラータ版、②エスコリアル版、中世ロシア語で③チホヌラーヴォフ版、④ボゴージン・チトフ版の4種があるが、いずれも存在したはずのオリジナル・テキストから変容を被りつつ派生したものと考えられる。この4種のテキストは、伝承されていないオリジナル・テキストから何かが欠落しているか、何かが付加されているか、欠落、付加以外の何らかの変容を遂げているかしていると考えられる。これらの欠落、付加、そのほかの変容が作品の本質にかかわるものであるがゆえに、オリジナル・テキストは何かということが、この作品をめぐる主要な問題点として浮上してくる。

まず、以上の4種のテキストを含む写本の特徴と、その成立年代について述べておきたい。

①グロッタフェッラータ版：もっとも古いのは、ギリシアと特別な関係にあったローマ近郊のグロッタフェッラータの修道院に収蔵されていたもので、字体の特徴から南イタリアのオトランドで書かれたと考えられている。引地は、この写本には「13世紀末から14世紀初頭に東方で生産された料紙」が用いられていると指摘しているが、当時貴重品であった紙が長い間使われずに放置されたとは考えにくいことから、成立年代は13世紀末から14世紀初頭ということになる⁽¹³⁾。

②エスコリアル版は、マドリッドの北西のエル・エスコリアル文庫にあったもので、引地によれば、料紙はその透かしの特徴から15世紀後半のものと推定され、筆写された年代も15世紀末、あるいは16世紀初頭と考えられる⁽¹⁴⁾。

③チホヌラーヴォフ版：N.チホヌラーヴォフの旧蔵書にあった1740年代の写本に収録されている。『イーゴリ軍記』を収録し、1812年のモスクワの大火で焼失したムーシン・プーシキンの写本に含まれていたテキストと同系統のテキストである。ムーシン・プーシキンの写本は、15世

(12) 博士学位請求論文『『デヴゲーニイの事績』—ロシア語、ギリシャ語所写本の比較研究によるアーキタイプ再建の試み』は未刊行のままである。

(13) 引地「ディゲニス」34頁。

(14) 引地「ディゲニス」45頁。引地はそのほかにトラブズン近郊のスーメラ修道院で発見された16世紀末か17世紀初頭に筆写された写本テキストについて述べているが、この写本は散逸している。引地「ディゲニス・アクリティス」3頁。

紀ないし16世紀のものであると考えられている⁽¹⁵⁾。中村はこの編纂本をA系統、『中世ロシア文学文庫』の解説は「第1編纂本」としている。

④ポゴージン・チトフ版：M. ポゴージンの旧蔵書にあった17世紀あるいは18世紀の写本に収録されている⁽¹⁶⁾。フィリパパ、マクシミアナ父娘とデヴゲーニイとの戦いのエピソードが含まれている。このエピソードは、ギリシア語の①、②のテキストには存在するが、中世ロシア語の③のテキストにはない。18世紀中葉に筆写されたA.チトフ所蔵本と同系統であると考えられる。中村はこの編纂本をB系統、『中世ロシア文学文庫』の解説は「第2編纂本」としている。

写本成立年代を一見すると、①、②と③、④のあいだには年代の大きな開きがあり、ギリシア語の①、②を継承して、中世ロシアの③、④が成立したと見なせそうだが、テキストを読み込み、その内容を子細に検討してみると、事はそう単純ではないことがわかる。大きく分けて、この作品には3つの問題点がある。

第1の問題点は、この作品が本来どのような作品であったかということである。テキストを残すもっとも古い写本が、14世紀前半のグロッツフェッラータ写本であるにもかかわらず、研究者たちは、この作品が10世紀末から12世紀前半に書かれたと考えてきた。この最古の写本の年代と作品が成立したと思われる年代とのあいだに200年以上の開きがあり、しかも、ギリシア語版もロシア語版も、写本によってテキストの異同があることから、この作品が本来どのような作品であったかが、じつはよくわかっていない。第2の問題点は、この作品の一貫性に関するものである。ディゲニスの父アミールについて書かれた前半部と、ディゲニスについて書かれた後半部が元来別々の作品であるとする考え方と、前半部と後半部を一貫性のある一つの物語であるとする考え方が対立している。そして、第3の問題点は、この作品が口承文芸に立脚した作品なのか否かということである。引地は、19世紀に採録されたギリシア語のバラードがあることを指摘しているし、この作品には、やはり19世紀に採録されたロシアの英雄叙事詩ビリーナとの類似性も見出される。

まずこの英雄叙事詩の物語構造から考えたい。渡辺は、前半部と後半部が元来別々の作品であり、のちに合体されたものと考えているようで、本来の叙事詩にあたるのはその前半部であるとし、「10世紀に編纂され、国境地帯での当時のビザンティン・アラブの対立状態が背景をなしている」と考える一方、後半部の成立年代を「11～12世紀」としている⁽¹⁷⁾。ユーフラテス川がビザンツ帝国の東国境となっていたのが、10世紀から11世紀にかけてまでのことであったこと⁽¹⁸⁾が、渡辺の推定の根拠となっていると思われるが、渡辺のこの理解は、作品がディゲニス・アクリ

(15) 中村「ロシアの『ディゲニス』」66-67頁。

(16) 同上。

(17) 渡辺「ディゲニス」『世界大百科事典』。

(18) 三浦「デヴゲーニイの事績」8頁；БЛДР. Т. 3. С. 365.

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

ティスという英傑についての叙事詩として伝承され、その意味では後半部こそが中心にあたりと考えられることと矛盾し、問題を孕んでいる。元来別々の作品であった前半部と後半部を合体させてこの作品が成立したという考え方は、後述するトリパニスの見解にも通じる見方である。

引地は、『ディゲニス・アクリテイス』について①包括的な論考の冒頭において、L. ポリテイス、C. トリパニス、R. ビートンを引用しながら、この作品の制作年代の幅を示唆している。その言語が共通近代ギリシア語で書かれていること、内容に新しい国民的意識の出現が認められることを根拠に、文学史家ポリテイスはこの作品を「叙事詩」と呼び、その制作年代は11世紀前半だと考えている。ギリシア史研究者トリパニスは、二人の異なる詩人による二つの韻文ロマンスが一つに統合されたものとして、当該作品を『ディゲニス・アクリテイスの叙事詩』と呼んでいる。このことは、先述のとおり、渡辺の考えと呼応している。一方、中世ギリシアのロマンスの研究者であるビートンは、『ロダンシとドシクリス』、『ドラシラとハリクリス』など12世紀ロマンス諸作品との関連から、当該作品は12世紀初頭に書かれたと考え、「原型ロマンス *proto-romance*」と呼んでいる⁽¹⁹⁾。

さらに『ディゲニス・アクリテイス』／『デヴゲーニイの事績』が、口承文芸と記述文学が隣接する領域にある作品であることも、この作品の謎を深めている。中村は、ギリシア語の『ディゲニス・アクリテイス』に比べて中世ロシア語の『デヴゲーニイの事績』がフォークロア的色彩を強化していると述べている。その例として中村が指摘するのは、敵を倒すデヴゲーニイを草の刈り手と喩える表現や、「疾風」、「雷電」、「稲妻」などフォークロアの特徴をもった名前をもつ馬が登場することである（後述）。

一方、引地は、ギリシア版についても、ホメーロスの叙事詩圏が存在したように、ディゲニス・アクリテイスの叙事詩圏が存在したと考える研究者たちがいることに言及している。『ディゲニス・アクリテイス』には、19世紀末に採集されたバラードのテキストもあり、このことも、この作品が口承文芸を背景として伝承されてきたことを示唆している。引地が指摘するように、たしかにディゲニス・アクリテイス叙事詩圏の存在を実証的に立証することは難しいかもしれないが、にもかかわらず、この作品はそのギリシア語版において、中世において書き言葉の主なる担い手であったキリスト教会の価値観とは明らかに異なるもの（たとえば、後述する婚外恋愛譚）を含んでおり、戸田が「民衆文学」と呼んでいるように、一定の口承文芸的基盤を前提にしなければ作品のふさわしい理解に到達しないことも事実である。

この作品の口承性が先鋭的に表れるのが、ギリシア人軍司令官の娘を妻として娶ったディゲニスが、女武者アマズネスの子孫であるマクシムウと関係をもつ婚外恋愛譚である。①グロッタフェッラータ写本テキストでは6巻に現れるこのエピソードは、②エスコリアル写本テキストに

(19) 引地「ディゲニス」1頁。

も存在するが⁽²⁰⁾、これに対して、中世ロシア語版では、③チホヌラーヴォフ版には、マクシムウにあたる女性が現れる同様のエピソードはなく、④ポゴージン・チトフ版のほうには存在するものの、このエピソードは婚外恋愛譚ではなく、軍司令官の娘（ストラティゴヴナ）と知り合う以前の話であるし、そのうえデヴゲーニイはマクシムウ（マクシミアナ）と関係をもつことはなく、その求愛を退けている⁽²¹⁾。このあたりに、ギリシア語版と中世ロシア語版の違いが端的に表れている。

ギリシアの①グロッタフェッラータ版ではほかにも、15歳のディゲニスが東方の若く美しい女性と関係をもったのち、妻のもとに戻ったという経験を、後年になってディゲニスが後悔するという1人称語りの婚外恋愛譚が、第5話として付け加えられているが、これは、デヴゲーニイの勇猛を神の恵みと関連づけるロシア語の③、④の世界観と明らかに背反している。この婚外恋愛譚は、ギリシア語の②エスコリアル版は収録していない。

筆者の考えによれば、第1の問題点、すなわち、『ディゲニス・アクリティス』／『デヴゲーニイの事績』がいかなる作品であるかを理解するためのカギが、この婚外恋愛譚なのである。このエピソードの①、②、④におけるあらわれ方の違いを比較、検討することは、この作品の本質を正確に理解することに寄与すると考えられる。次章では、その検討の準備作業として、大きく視野を取って、ギリシア語版と中世ロシア語版の同一性と差異について整理しておきたい。

3. 『ディゲニス・アクリティス』と『デヴゲーニイの事績』の同一性と差異

マヴロゴルダートがその著書の末尾で、①グロッタフェッラータ版を基礎に諸版における物語の展開を表にして整理しているので、その表にしたがって『ディゲニス・アクリティス』の物語の展開を見てみたい。

【粗筋（ディゲニス）】⁽²²⁾

(A) カップドキアのアアロン・アンドロニコス・ドゥカスとアンナのもとに美しい子供エイレネが生まれる。①

(B) 彼の父親が追放されているあいだ、アミール、ムスロスが彼女を連れ去る。彼の5人の兄弟たちが追跡する。末の弟のコンスタンチンがアミールを打ち負かす。①④

(C) しかし、兄弟たちは妹を見つけ出すことができない。アミールは彼女の好意を引き、彼女の手を求める。アミールはキリスト教に改宗し、妹、兄弟たち、アミールがドゥカスの城へ帰還する。改宗したアミールはエイレネと結婚する。バシレオス・ディゲニスが誕生する。①②③④

(D) アミールの母親が彼に手紙を書く。兄弟たちとの喧嘩のあと、アミールは花嫁を残してエ

(20) 引地「ディゲニス」10-11頁。

(21) *Кузьмина Девгениево деяние*. С. 174-178.

(22) *Mavrogordato Digenis Akritis*, pp. 258-259.

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

デッサに行き、母親とその家族をキリスト教に改宗させて、彼らとともにドゥカスの城に戻る。

①②④

(E) アミールの英雄的行為と偉業が語られる。ディゲニスの教育と最初の狩りについて語られる。

①②③④

(F) ディゲニスが盗賊たちの年老いた首領であるフィリパパを訪ね、自分を仲間に入れてくれるように求める。①②④

(G) ディオゲネスがドゥカス将軍の娘であるエウドキアに恋の歌を歌い、彼女を連れ去る。エウドキアの兄弟たちによって追跡される。①③④

(H) ディゲニスとエウドキアの婚礼が語られる。婚礼の引き出物の列挙。①②③④

(I) エウドキアとともに国境警備兵の側にいるディゲネスについての話。家庭内の行き違いをディゲネスが調整する。盲人にされた料理人の話。①②

(J) ロマニアの皇帝の訪問についてのエピソード。ディゲネスが馬を捕まえ、ライオンを殺す。

①②③

(K) ディゲニスの自慢。捨てられた花嫁、アミール、ハプロッラブデスの娘をオアシスで救出する。その話を聞き、誘惑を受け容れる。①

(L) 5月。泉に住む蛇とライオンを倒す話。砂漠の歌。百人の盗賊たちを退ける。①②④

(M) 3人の騎手たちが、ディゲニスを侮辱し、そのためにお金を受け取ったアンキラス(女の召使)の話を聞く。①

(N) 3人の盗賊の頭たち、フィロパボス、キンナモス、イオアニキオスがディゲニスに打ち負かされるが、許される。①②

(O) この3人の盗賊はイオニキオスのためにエウドキアを盗むように企てる。助けを求められたアマゾン族のマクシモは、メレメンツェスと彼の一番頼りになる男たちを呼ぶ。①②

(P) ディゲニスは3人の頭を追い散らし、丘の頂上にエウドキアを隠し、マクシモを馬から引きずり下ろし、彼女の配下の人々を四散させ、5人の頭目を負かす。マクシモはディゲニスに再び戦うように求める。①②

(Q) 翌朝、ディゲニスはマクシモと戦ったのちに、彼女を愛し、エウドキアのもとに戻る。①②④

(R) エフフラテス川のほとりの庭園と宮殿。カッパドキアでディゲニスの父が死ぬ。ディゲニスの母は彼らとともに暮らす。家庭の切り盛りについての記述。①②

(S) 平和を取り戻し、皇帝ニケフォロスからの役職の保持者としての栄光を得る。①②③

(T) ディゲニスは病気になる、彼ら二人がともに暮らすことについて語る。エウドキアが死に、ディゲネスが死ぬ。①②

(U) 葬礼と喪の悲しみ。この世の虚しさというモラル。①③

次に中村がパスカルの整理をもとに、中世ロシア語の『デヴゲーニイの事績』の粗筋を記述したものを、必要に応じて修正しながら、次に示したい。中村は、パスカルの章、節の区切りをそのまま使っている。

【粗筋 (デヴゲーニイ)】⁽²³⁾

I.

(1) アラブの王アミールがギリシア領に攻め入って、皇帝の遠縁にあたる寡婦の美しい娘をさらっていく。④

(2) 娘の三人の兄が跡を追い、アラブの大軍を打ち破ってアミールの天幕をつきとめる。

(3) アミールはすでに娘を殺してしまったと告げるが、それが偽りとわかって兄弟は王の天幕にとってかえす。④

(4) アミールが一騎打ちをいどんだので、くじ引きのすえ末弟が彼に立向い一撃のもとにこれをたおす。④

(5) アミールは彼らの妹を妻にしたいと申し出る。兄たちは娘のもとにいて安否をたずねる。④

(6) 娘が結婚に同意し、アミールはキリスト教に改宗してギリシアにおもむくことを約束する。④

(7) アミールは家族や部下に別れをつけ、自分の代りに弟を王にする。④

(8) ギリシア領に移ったアミールは、ユーフラテス河で洗礼を受け、盛大な結婚式をあげる。④

(9) アミールの母は三人の家臣に駿馬を与えアミールを連れ戻そうとするが、この企みは失敗におわる。④

II.

(10) アミール夫婦に息子が生まれ、デヴゲーニイという名が与えられる。デヴゲーニイは幼少から武芸に非凡な才能を発揮する。③④

(11) はじめて父と狩りに出たデヴゲーニイは素手で大鹿をとらえ、さらに熊などをたおす。③④

(12) 手を洗うために泉に行くと多頭の大蛇があらわれたので、デヴゲーニイはその首を斬りおとす。③④

III.

(13) フィリパパおよびその娘マクシミアナなる者がデヴゲーニイに手紙を送り、会見を申し込んでくる。④

(23) 中村「ロシアの「ディゲニス」」64-65頁。

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

(14) フィリパパらの大軍はデヴゲーニイの小部隊に攻めかかるが、かえってデヴゲーニイのために打ちやぶられ、父娘もろとも捕えられる。④

(15) フィリパパはストラティグという勇将とその娘のことをデヴゲーニイに語る。マクシミアナはデヴゲーニイに結婚を申し出るが拒絶される。④

IV.

(16) デヴゲーニイはストラティグの町に行き、その邸のまえでグースリをかなでる。娘のストラティゴヴナがそれを聞きつける。③④

(17) デヴゲーニイが娘を邸から連れ去る。しかし父親はその知らせを受けても信じようとしなない。③④

(18) デヴゲーニイの挑戦に応じてストラティグとその息子たちが大軍をひきいて攻め寄せるが、デヴゲーニイに打ちまかせられ捕えられてしまう。③④

(19) デヴゲーニイはストラティグの家でその娘と結婚して盛大な酒宴をもよおし、父母のもとに戻ってくる。③④

V.

(20) ワシーリイなる皇帝が手紙を送ってデヴゲーニイを招くが、彼はこれをことわる。皇帝は大軍とともにユーフラテス河畔にやってくる。③

(21) デヴゲーニイはわずかな手兵で皇帝の軍勢を迎えうち、これを打ち破ってワシーリイ自身を捕虜とする。③

(22) 皇帝の町に入ったデヴゲーニイはみずから町を支配し、父を皇帝の位につける。③

【粗筋（ディゲニス）】と【粗筋（デヴゲーニイ）】の対応関係を以下に示す。

(B) → (1)

(C) → (2)、(3)、(4)、(5)、(6)、(8)、(10)

(D) → (7)、(9)

(E) → (11)、(12)

(G)、(H)、(I) → (16)、(17)、(18)、(19)

(J) → (20)、(21)

(F)、(L)、(N)、(O)、(P)、(Q) → (13)、(14)、(15)

(U) → (22)

【粗筋（ディゲニス）】(A)、(K)、(M)、(R)、(S)、(T)は、【粗筋（デヴゲーニイ）】に対応箇所をもたない。ギリシア語の『ディゲニス・アクリテイス』と中世ロシア語の『デヴゲーニイの事績』の違いを以下の5点にまとめられる⁽²⁴⁾。

(24) 中村の整理を参考にしている。中村「ロシアの「ディゲニス」65-66頁。

- (α) 前者は散文であるが、後者は6本の伝来写本中5本までが韻文で書かれている。
- (β) 中世ロシア語訳は全体としてかなり短くなっている。マヴロゴルダートがまとめた表によれば、ギリシア語写本中の最も完全なものでは21のエピソードが数えられるが、このうち『デヴゲーニイの事績』に含まれるものは10((B)、(C)、(D)、(E)、(F)、(G)、(H)、(J)、(L)、(P))にすぎないと中村は整理している。しかしながら、筆者の考えでは、子細に見てみると、【粗筋(ディゲニス)】(I)、(N)、(O)、(Q)、(U)にも【粗筋(デヴゲーニイ)】との対応関係がある。どのエピソードをとってみても、ギリシア語写本の叙述のほうがくわしいという中村の指摘は適切である。
- (γ) エピソードの内容が異なる。最も注目し値するのは、ギリシア語写本では主人公が皇帝に表彰されるのに、ロシア語訳では主人公が皇帝と戦い、帝位を奪うことである(【粗筋(デヴゲーニイ)】V)。ロシア語訳にかぎってフィリパパとマクシミアナのあいだに父娘の関係が存在することになっている(III)。
- (δ) 中世ロシア語訳にはギリシア語写本にない独特の民話的なモチーフがみとめられる。たとえば、(a) 敵をなぎ倒すデヴゲーニイは、草の優れた刈り手に喩えられている。また、(6) I・9のエピソードで、アミールの母は「疾風」、「雷電」、「稲妻」と名づけられる三頭の馬を家臣に与える。それに乗ると騎手の姿が見えなくなったり、ひづめの音がアラブ全土に鳴り響くという魔法の馬である。(b) I・12のエピソードでは、アミール父子の立寄る泉の水はきらきらと輝いて、ふつうの人間は近くに寄りつかぬことになっている。また、(r) III・15でデヴゲーニイがマクシミアナの求婚を退けるのは、彼女と結婚すればあと16年しか生きられないのに、ストラティゴヴナを妻とすれば、36年の余生があることをあらかじめ「運命の書」によって知っていたからである。
- (ε) 「デヴゲーニイの武勲」の若干の登場人物の名前はギリシア語の普通名詞をそのまま用いている(アメラス、ストラティグなど)。ギリシア諸本によれば主人公はバシレオスという名前をもつが、この名は中世ロシア語訳には現れない。これに関して、主人公の父母や妻の系譜がギリシア語写本では何代もまえにさかのぼって明らかにされているのに、ロシア語訳では全く触れられていない。

4. 一代記としての『ディゲニス・アクリティス』／『デヴゲーニイの事績』

【粗筋(ディゲニス・アクリティス)】からもわかるように、『ディゲニス・アクリティス』は英雄の一代記の性格を濃厚にもっている。引地にしたがって、もう一步踏みこんで『ディゲニス・アクリティス』の内容を見てみたい。今度は、そのディテールに着目しながら、どのようなタイプの物語なのかを見極めたい。

ディゲニス・アクリティスの父親はシリアのアミールで、高貴な生れのうえに財産もあり、分

別も勇気も優れていた。容姿もエチオピア人のように肌が黒くはなく、金髪で美しく、平生野獣を狩って楽しんでいる。そのような大公の彼が、トルコ人、アルメニア人、アラブ人、トログロデュティスの歩兵を集めて、東ローマ帝国の領土に侵入し、多くの都市を荒らし、カッパドキアの將軍の家に押し入る。將軍は折しも皇帝に讒言されて追放の身であり、五人の息子たちも国境地帯に行って留守であった。財産は奪われ、人々は殺されて、將軍のこの上なく美しい娘は捕えられ、運び去られる。運よく助かった將軍の妻は息子たちに手紙で訴え、息子たちは少数の兵を連れてアミールの許へ行き、代償の富を約束して妹の返還を求める。それに対してアミールは、兄弟の代表との一騎打ちを提案し、負けたら妹を返すという。ここで、異教徒のアミールは正確にギリシア語を使うことができると述べられている。

兄弟たちのうち最も年下で妹と双生のコンスタンティノスが、籤で選ばれて相手になる。槍は折れ、互いに傷つきながら、一騎打ちは何時間も決着がつかずに続くが、サラセン人たちの勧めで、ついにアミールは相手の勝ちを認め、印章を渡して幕屋を探すようにいう。しかしながら妹は見つからず、兄弟たちは帰る途中、大勢の娘たちが惨殺されているのを発見する。娘たちは手足を失い、あるいは首を切り落され、臓物がとび出している。酷たらしい屍体の描写が生々しい。このように示された東方のムスリムの残虐さは、誓いに反してキリスト教徒に平然とついた嘘と相俟って、最初にアミールを思慮分別に富んでいると紹介していることに反し、キリスト教の側から見た皮肉な設定であると言える。五人の兄弟たちは自らの頭に土をかけて嘆き、再びアミールの許に行き、妹を渡さぬなら自分たちを殺せと涙を流して訴える。

そこでアミールは兄弟たちの素姓をたずね、自らの生い立ちを語り、美しい女性が自分を征服したと告白し、もし自分を義兄弟にしてくれるなら、ローマ帝国に行き、キリスト教徒になろうと言ひ、自分の幕屋に連れてきてあった妹に兄弟たちと再会させる。続く①グロッタフェッラータ版の第2巻では、アミールが誓い通りに捕虜をすべて釈放し、娘の母親は息子たちの報告に喜んでキリストを讃え、娘との結婚式を挙げさせ、アミールに洗礼を受けさせる。

息子の行動にアミールの母親は嘆き、呼び寄せる手紙を書く。選ばれたアラブ人たちが手紙をたずさえ、人里離れたラッコペトラの岩に野営して、そこから手紙を届ける。アミールには東方にすでに妻子たちがいることになっている。手紙を読んだアミールは母を訪ねたく、現在の妻に伝えると相手はどこへでも喜んで一緒に行くと答える。ところが偶々双生の兄弟コンスタンティノスは夢を見る。それは自分がラッコペトラに鷹を見に行くと、一羽の獐猛な隼が、一羽の鳩を追いかけ、いよいよ捕えるというとき、二羽ともアミールと妹と一緒にいる部屋に入ってきて、自分は急いで妹のほうに走って行ったところで目が覚めたというもので、話を聞いた長兄は夢を解釈し、隼がアミール、鳩は妹、鷹どもは誘拐者と判断、兄弟たちは急いで岩へと駆けつける。アラブ人たちを見つけた兄弟はアミールのもとへ行き、激しやすい末の弟が義兄を「サラセン人」呼ばわりし、妹と子供を置いてただちに去れと促す。すでに夫婦の間には子供が生れている。

夢の話など知らぬアミールは、泥棒扱いされ、恥じて黙す。そして妻のところに行き、自ら一緒に行くと言っておきながら、兄たちに訴えとはと恨みごとをいう。身に覚えのない妻は言葉もなく悲しむが、晩になって夫に訴え、兄たちにもアミールはシリアへ戻って母親を連れてくる予定なのだと言くと説く。髪を引きむしって嘆く妹の姿に、兄弟はアミールに謝って和解する。

アミールはすぐ戻ることを約し、出発する。シリアの地でアミールは母に向ってキリスト教を説く。その内容は、主としてニカイア信条を敷衍したものである。息子の言葉によって母親は息子と同じ信仰に入る気持になり、一緒に東ローマ帝国の土地へ行くことにする。再び西側に戻ってきた夫に妻は感激し、夫は息子を腕に抱き上げる。妻の家族は夫の母親とも喜んで対面し、あらためて結婚の祝宴が行われ、アミールの母は洗礼を受ける。アラブの地に残されたアミールの子たちがどうなったかは触れられていない。

バシレオス・ディゲニスの子供の時から教師について3年間勉強し、その後は乗馬を学び、狩猟をしたいと父に願う。父親は内心では喜びながらも、まだ12歳で野獣と戦うのは無理だと答えるが、息子がしきりにせがむので結局認めることになる。父親と叔父と共に森に入った少年は、まず熊と出会う。叔父は杖を用いて戦うように勧めるが、雌熊の顎をつかみ、素手で首をひねって殺す。次いで鹿が跳び出してきたのを、彼は豹のごとくおどろかかり、後脚をつかんで2つに裂いてしまう。人々は驚嘆し父と叔父も、まさに神が送ってきた息子だと喜んでいて葦の茂みから巨大なライオンが出てくる。襲いかかる猛獣を、今度は剣で叩き切る。

やがて彼は若い娘と出会うことになる。道の途中に大將軍の邸があり、ディゲニスの声を耳にした邸内の者たちは、かのオデュッセウスがセイレーンたちの歌を聞いたときのように感動した。若者を目にした娘も恋におちる。しかし、アミールの話では、すでに大勢の高貴な東ローマの男たちが彼女のために命を落している。娘を攫って行こうとする男がいると、父親は待ち伏せして捕え、首をはねたり眼をつぶしたりするというのである。ディゲニス・アクリティスは娘とひそかに言葉を交わし、娘から指輪を贈られ、ついに馬を用意して娘の窓辺を訪れ、窓から身を乗り出した娘を馬に乗せ、將軍に聞こえるように邸の前で、娘をくれと叫んで走り出す。父親の將軍も娘の兄弟たちも馬に乗り、大軍が後を追う。若者は多くの兵を斃すが、娘の願いに兄弟たちを傷つけぬよう馬から落し、將軍に恭順の意を示して娘を求める。父親は許す。若者の父アミールは娘を喜び迎え、母親も花嫁を抱擁、アミールは妻の兄弟たちと三千人の若者たちを遣わして將軍を結婚式に招く。將軍はよろこんで妻とともに大勢の部下を連れて出席する。数々の持参の宝物や、新郎側からの花嫁への贈り物が紹介される。祝宴は3ヶ月も続く。次は花嫁の実家の將軍の邸に移っての祝宴があり、その後、若夫婦は辺境の地で多くの時を過ごす。

ディゲニス・アクリティスの評判は皇帝の耳にまで達し、本人に会いたく思った皇帝は手紙を出すすが、エウフラテス河まで来て欲しいとの返事に、皇帝自身が百人の兵の護衛とともに出向く。若者は一人でこれを出迎え、皇帝も玉座から降りて抱擁し、彼を貴族のパトリキオスにする。

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

ギリシア神話のヘラクレスを想わせるような、恐ろしいライオンや、火焰を吐く3頭の大蛇の退治がなされたのち、ディゲニス・アクリテイスは妻を襲おうとした総勢45人もの匪族を杖で皆殺しにし、匪族の3人の首領をこらしめたので、首領は自分たちの身内でギリシア神話で有名な女武者アマゾン族の子孫のマクシムウに訴える。マクシムウは腹心の部下に百人の匪賊を選び集めるようにいいつけ、彼らを率いて出陣する。ディゲニス・アクリテイスは妻を洞窟にかくまって置き、突進してきたマクシムウの馬の首を切り落して落馬させる。命乞いした彼女が、もう一度だけ一騎打ちを求めるのを認め、再び落馬させると、女武者は自分の身体を取るように求める。美しい処女の胸もとを目にして、主人公は姦通の罪を犯す。

ディゲニスとエウドキアは、エフフラテス川のほとりで庭園のある宮殿で栄華の暮らしをしている。カッパドキアでは、ディゲニスの父アミールが死に、ディゲニスの母はユーフラテス川のほとりの宮殿に移り、デヴゲーニイ夫婦たちとともに暮らす。デヴゲーニイとエウドキアは家庭の切り盛りをする。平和を取り戻したデヴゲーニイは、皇帝ニケフォロスから役職をもらい、栄光を享受するが、やがてディゲニスは病気に罹り、エウドキアとともに暮らすことを望む。エウドキアが死に、ディゲニスが死んだあと、葬礼の様子が記されるとともに、この世の虚しさというモラルが語られる。

ここに見られるのは、ディゲニス・アクリテイスという英傑が、キリスト教とイスラームの対立という複雑な事情のなかで出生し、成長し、偉業を達成し、配偶者を獲得し、誘惑にもかかわらず配偶者との婚姻関係を維持し、しかし年齢とともに衰え、人生を振り返りつつ死を迎え、惜しまれつつ葬られるという壮大な人生のドラマである。

以上のことを踏まえたうえで、この作品における婚外恋愛譚について考えてみたい。上記の婚外恋愛譚に現れるその相手の名前「マクシムウ」は、中世ロシア語版でも「マクシミアナ」というほぼ同じ名前で見られ、同一人物であることが窺われるが、その人物像と作品のなかでの役割はかなり異なっている。④ポゴージン・チトフ版テキストから引用してみよう。

デヴゲーニイの勇敢さについての、書かれたる物語。フィリパバと乙女のマクシミアナがいかに書簡を送ったか。

フィリパバとマクシミアナはデヴゲーニイの勇敢さと力について聞くと、ウサギを網に捉えるように、どうしたら彼を捕えることができるかを考えはじめた。フィリパバは勇敢で力も強く、多くの軍隊をもっており、同様に乙女のマクシミアナは男の力をもっており、たくさん軍勢を従えていた。

彼らは栄えあるデヴゲーニイに向けて進軍し、やってきて、ギリシアの町に到着するまえに、ユーフラテス川のほとりで歩みを止めた。マクシミアナは甘言とともに栄えあるデヴゲーニイに書簡を送った。「おお、光まばゆき太陽なる君、栄えあるデヴゲーニイよ。そな

たは、あらゆる月のなかで5月が君臨しているように、私たち勇敢で力ある者たちみななかで君臨なさっています。5月には、あらゆるものが天のもの、地のものも花咲き、木々も葉を茂らせ、すべてのものは天の美しさを身にまといますが、同じように、あなた、栄えあるデヴゲーニイさまも私たちを身にまとって輝きます。栄えあるデヴゲーニイよ、私たちもあなたに祈ります。面倒だとは思わずに、骨を折って私たちのもとに来てください。多くの軍勢を連れずにユーフラテスの川岸に来てください。私たちがあなたの若さと勇敢さを見ることができるよう。私たちには、ほかにどんな思惑もありません。」

栄えあるデヴゲーニイはこの手紙を読み終わると、笑い出して、自分の父親にこう言った。「父上よ、私は騎乗して出かけ、栄えある勇敢なるフィリパパと乙女のマクシミアナを見てきたいと思います。」彼の父は言った。「私の愛しい子、栄えあるデヴゲーニイよ、戦いに赴こうと考えるのはおまえにはまだ早い。おまえは勝利の戦いに出たことはないのだから。というのは、フィリパパは戦いにおいて力強く、勇敢だし、同様にマクシミアナもたくさんの軍勢を従えている。」⁽²⁵⁾

甘言によってデヴゲーニイをおびき寄せようとするマクシミアナ、出陣に逸るデヴゲーニイ、それを引き留めようとする父アミールとのやり取りがもう一回繰り返されたあと、デヴゲーニイはついに陣し、フィリパパ、マクシミアナを平らげる。フィリパパとマクシミアナは父と娘であるが、すでに述べたように、これは中世ロシア語版のギリシア語版とは異なる特徴である。

降伏したフィリパパとマクシミアナは、さらに美しくて勇敢な娘、ストラティゴヴナがいることをデヴゲーニイに伝える。このストラティゴヴナが、ギリシア語版のエウドキアにあたる。デヴゲーニイは『運命の書』によって、もしもマクシミアナと交わったならば寿命が16年延び、ストラティゴヴナと誼を通じたならば、36年寿命が延びることを知り、ストラティゴヴナに会いに出かける。ここでは、デヴゲーニイの強さと勇敢さに焦点が当てられる。中世ロシア語版のこのエピソードは、不倫どころか恋愛沙汰とも無縁であるように見えるが、有限なる寿命を前提とした英傑の一代記の性格は保っている。一言付け加えると、①第5話の婚外恋愛譚は、ギリシア語版ロマンス化の過程で後になって①グロッタフェッラータ版に付加されたものと筆者は考えている。

ここで引地が、一代記の性格をもつ作品として、伝カリストネス『アレクサンドロス大王物語』（中世スラヴ世界では、『アレクサンドリア』の名前で知られる）との類似性を指摘しているのは妥当なことである。ここでも、婚外恋愛譚が物語展開上重要な役割を果たしている⁽²⁶⁾。次

(25) Кузьмина. Девгениево деяние. С. 174-178. この箇所は③のみに現れるが、筆者による日本語訳の原典であるトゥヴォローゴフによるテキストでは採用されていない。邦訳は、筆者によるものである。

(26) 引地「ディゲニス」15頁。

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

に『ディゲニス・アクリテイス』／『デヴゲーニイの事績』と『アレクサンドロス大王物語』との類似性を考えたい。

5. 『アレクサンドロス大王物語』と聖者伝との類似性—人生の虚しさ

『アレクサンドロス大王物語』によれば、主人公アレクサンドロスは、その母オリュンピアスと、エジプトの王で練達の呪術師であったネクテナボンとの不倫の結果、出生したことになる。『ディゲニス・アクリテイス』と同様に、ここでも不倫譚が物語の一つの焦点となっている。この出生譚／不倫譚は、異教ギリシアの神話の影響を受けながらも、中世キリスト教の聖者伝の枠組みを継承するものである。

夫ピリッポスとのあいだの不妊に悩み、夫の愛を失うことを不安に思うオリュンピアスは、練達の呪術師でもあるエジプト王ネクテナボンに悩みを打ち明ける。オリュンピアスに一目ぼれしたネクテナボンは彼女にアモン神に頼るように助言する。ネクテナボンはアモン神の姿に変身して、オリュンピアスの部屋に忍んで入って彼女と交わり、アレクサンドロスが生まれる。

このエピソードで何よりもまず注意を引くのは、異教ギリシアの神話的要素である。オリュンピアスの美しさの虜となったネクテナボンは、魔術によってアモン神に変身し、オリュンピアスと親密な関係になるが、このことは変身するゼウスを思い起させる。アルクメーネーに惚れたゼウスは、彼女の許嫁であるアムピトリュオーンに変身し、彼女と性的な関係に入り、その結果、ヘラクレスが生まれているし、また、ダナエの美しさの虜となったゼウスは黄金の雨の姿となり、彼女と交わり、その結果、ペルセウスが生まれている。

しかしながら、アレクサンドロスの物語をもっと注意深く読んでみると、このエピソードのなかには、キリスト教聖者伝の物語的な枠組みがあることに気づく。

まず第1に、『アレクサンドロス大王物語』は『ディゲニス・アクリテイス』と同様に、主人公の出生から死までを描き出しているが、これは聖者伝というジャンルがもつ物語的枠組みと同じである。また、『アレクサンドロス大王物語』では、主人公の生誕とその両親について語られているが、この始まりも聖者伝の始まりと似ている。キエフ・ルーシの『洞窟のフェオドーシイ伝』においては、モスクワ・ロシアの『ラドネジのセルギイ伝』と同様に、物語は主人公たちの生誕とその両親たちの話からはじまっている。キリスト教の聖者たちの聖者伝では、登場人物たちはその功業において、すなわちキリストへの真似びの振舞いにおいて、イエス・キリストと隣接している。この点において、『アレクサンドロス大王物語』の作者は、自らの物語の方法を聖者伝の主人公たちの物語の方法に近づけることによって、自らの主人公であるマケドニアのアレクサンドロスとイエス・キリストを対比させている。

第2に、オリュンピアスとフィリップは長いあいだ不妊に苦しみ、その苦しみの果てにはじめて、物語の主人公であるアレクサンドロスが生まれるが、これは洗礼者ヨハネとイサクの逸話の

レミニセンスである。洗礼者ヨハネの両親であるザハリヤとエリザベータも、イサクの両親であるアブラハムとサラも長いあいだの不妊のあと、洗礼者ヨハネ、イサクという子室に恵まれている。

第3に、マケドニアのアレクサンドロスは、イエス・キリストのように、偉業を成し遂げたあと、若くしてこの世を去る。『セルビア版アレクサンドロス大王物語』のなかでは、アレクサンドロスは40の年にこの世を去ることが予言されているが、伝統的にイエス・キリストは30歳で十字架にかけられたと考えられているし、歴史的な現実としても、ギリシア語版伝カリステネス『アレクサンドロス大王物語』でも、アレクサンドロスはキリストとほぼ同じ年齢32歳で世を去っている。

第4に、2人の女性、オリュンピアスと神の御母マリアは、彼らが淫蕩な女性だったという非難を招き寄せている。私たちが見てきたとおり、オリュンピアスはネクテナボンと姦通している。神の御母に関しては、中世期の説教において、キリスト教の説教者たちがこの類の非難と懸命に戦った痕跡が見出される。たとえば、キエフ府主教イラリオンは自らの説教『律法と恩寵についての講話』のなかで、次のように述べている。「あの者らはこの方（イエス・キリストのこと―筆者注）を詐欺師と名づけ、淫蕩な行いから生まれたと誹謗し、ベルゼブルの力によって悪霊を追いだしたと言いました。」⁽²⁷⁾このほかにも、スモレンスク人クリメントは、『創世記』のなかからザラ、ペレッツ、ユダ、タマル、そのほかの人物のエピソードを引用しながら、そのような非難の意義を否定しようとしている⁽²⁸⁾。プスコフ近郊メリョトヴォ教会のスカマローフ像の主題も、この類の神の御母に対する誹謗に属するものと言える⁽²⁹⁾。

以上のことから、『アレクサンドロス大王物語』は、異世界のイエス・キリスト伝というべき英傑の一代記であると結論づけことができるが、同じ性格を『ディゲニス・アクリティス』も共有している。いずれもキリスト教の聖者伝の語りの枠組みを借りて、誕生からその死に到るまでを語っている。したがって、その前半部と後半部とを切り離して、別々の作品だったと見なす渡辺やトリパニスの考えは間違っていると言わざるを得ない。『デヴゲーニイの事績』を締めくくる以下の下りは、英傑の死で締めくくられる『ディゲニス・アクリティス』の終わりにも通じるものがある。デヴゲーニイは、皇帝ワシーレイと戦ってその皇帝の位を奪い、その位を父であるアミールに献上し、こう慨嘆する。

「私には、生きることのできる歳月があと12年残っています。いまはゆっくり休みたいです。私はすでに自らの若さゆえに多くの兵士たちを見、多くの勝利を見てきました。」このよう

(27) 三浦清美編訳『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』松籟社、2022年、25頁。

(28) 三浦『中世ロシアの雄弁文学』100-103頁。

(29) *Бобров А.Г., Миура К.* Литературный источник Мелётовской фрески // ТОДРЛ. Т. 63. СПб., 2015. С.485-498.

いかにギリシアの『ディゲニス・アクリタス』はロシアの『デヴゲーニイの事績』になったか

にデヴゲーニイは自らの父に言い、彼をツァーリの玉座に据えた。自分の虜囚たちを呼び寄せ、彼らには自由を与えた。しかし、カナマムとイオアキムには顔に刻印をし、すべての者たちは大きな喜びのなかにおいて、このような歳月が長く続いた⁽³⁰⁾。

『ディゲニス・アクリテイス』と『デヴゲーニイの事績』は、語られる事件のうわべではかなり異なっているのだが、物語の根底では互いに通じ合うものがある。それは、伝統的にソロモンのものでされてきた『コヘレトの言葉』に通じる「人生の虚しさ」という主題である

6. ブイリーナ化して成立した『デヴゲーニイの事績』

3.(δ)において、中村がすでに『デヴゲーニイの事績』がロシア・フォークロア化した作品であることを指摘し、(a)草の刈り手のイメージ、(b)「疾風」、「雷電」、「稲妻」という馬の名前、(b)泉のイメージ、(r)デヴゲーニイの寿命の4点を挙げているが、本稿の結びでは、(d)籤の趨勢というモチーフを挙げて、(a)、(b)、(b)、(r)、(d)のモチーフが、17世紀から採録が始まっているロシアの英雄叙事詩ブイリーナに由来するものではないかという仮説を提示したい。『デヴゲーニイの事績』で、(d)「運命の籤」というモチーフは、アミールから兄弟たちがデヴゲーニイの母となる娘を奪還しようとする場面で次のように表れる。

兄弟たちは天幕から離れて賽を投げた。最初に賽が投ぜられたとき、一番年下の弟が決闘に赴くものと賽の目が出た。兄弟たちは、一番年下の弟がツァーリ、アミールと戦うことがないようにと、2度目にふたたび賽を投げた。というのは、ツァーリ、アミールは強力だったから。しかし、2回目も賽は一番年下の弟に、と出た。彼らは3度目に賽を投げた。またまた一番年下の弟がツァーリ、アミールとの決闘に赴くもの、と賽の目が出た。というのも、この弟はその妹と同じ母の子宮からまったく同じ日に生まれたのだから⁽³¹⁾。

これとまったく同じモチーフが出現するのは、ノヴゴロドの豪商についてのブイリーナ『サトコ』である。豪商サトコは海で嵐に会い、海の支配者の気持ちを鎮める生贄を選ぶために籤を引くが、3度の籤⁽³²⁾はいずれも生贄がサトコであることを示す。

ノヴゴロドの豪商サドコは、勇ましい配下の者どもにむかって言った。「わがいとしの勇

(30) 三浦『デヴゲーニイの事績』21頁。

(31) 三浦『デヴゲーニイの事績』45頁。

(32) 1回目の籤は、しもつけの木(部下)と純金(サトコ)、2回目の籤は純金(部下)と樫(サトコ)、3回目の籤は樫(部下)と菩提樹(サトコ)であるが、すべてサトコの籤が沈む。

敢な部下たちよ。海の王はわたしのなかの生きた人間をお望みのようだ。わが勇敢な部下たちよ。しもつけの木の板を取り出して籤をつくってくれ。その籤にめいめいの名前を書き、それを青海に流すのだ。わしは純金で自分の籤をつくろう。青海に籤を流して海中に自分の籤が沈んだ者が海底に赴くことにしよう。」すると勇ましい配下の者どもの籤は一つ残らず、ほおじろ鴨のように波間にうかんだが、豪商サドコのくじだけは見るまに海底に沈んだ⁽³³⁾。

ほかにも主人公の勇気のモチーフの繰り返しの循環的な話法も、『デヴゲーニイの事績』とフィリーナの類似性を示している。すでに中村が指摘したように、『デヴゲーニイの事績』は『ディゲニス・アクリティス』の粗筋を簡略し、ロシア・フォークロア化した作品であったが、フィリーナ『サトコ』との話法とモチーフ類似が示すように、この作品は中世ロシアにおいて、フィリーナの一つの変種として成立したものではないかと考えられる。

(33) 中村喜和編訳『ロシア英雄叙事詩フィリーナ』平凡社、1992年、212-213頁。